

『ガラクタ広場』実験記

宮本次郎

一 はじめに

たとえば「今の子はナイフで鉛筆も削れない」という批判がある。なぜ削れなくなったのか。鉛筆削り機という便利なものが出現したからだ。なぜそれが便利なのか。危ない刃物で自傷他傷することがない。ごみをちらかさないから、その後片づけの必要もない。誰でも早く、きちんと削れる。——こうした合理性は、私たち大人社会では歓迎こそすれそれほど問題にしないにもかかわらず、こと子どものことになると、何かおかしいのではないかと感じるのはなぜだろうか。私たちは電気洗濯機や炊飯器によって、多くの自由を獲得してきたが、手で洗い、薪でも飯を炊けるといふことの方が、人

間の自由にとつては根本的であるということを感じているからではないか。

たとえば「今の子は集団で遊べない」という批判がある。昔にはゲームの類は氾濫している。子ども向けの書籍も数多い。家庭にはテレビやラジオ、ステレオやテープレコーダーがある。外は、車や痴漢で危険だ。各種の塾やおけいごごとがある。私たち大人も、仕事の疲れをバチンコ相手に気晴らしするか、せいぜい麻雀ができるくらいの気のあつた少数の方がよけいな気をつかわずにすむと考えているにもかかわらず、こと子どものことになると、集団でわいわい遊べないことが気にかかるのはなぜだろうか。私たちはたしかに一定の余暇を享受しようよ

うは少数で楽しむよりも、喜びを分かちあい、喜びがごだましあうことの中にあることを、直感しているからではないか。

たとえば「今の子は自主性がなし、自己規律にも欠ける」という批判がある。選挙が呼びかけられ、参加と自治が叫ばれるが、学校から大人社会に至るまで、必ずそれは、責任の委譲によって責任をとらされるか、金をとられるか、あるいは末端管理の下請けを要請されるかであることに秘かに気づいているにもかかわらず、こと子どものことになると、なぜ自主性や自己規律をもって欲しいと思うのか、至るところで管理の網にとらえられつつ、自己決定と行動とその結果が、直接自分(たち)のものであるような、そのような運命を望んでいるからで

はないのか。

手づくり塾・手づくり工房を運営しつつ、私たちはそのような思いを抱き続けていた。とはいえ、急激な都市化の中で、大人社会はもとより、子ども社会にも、自主管理できる場はなくなっている。公園は、立入禁止等の禁止札に象徴される、見るための、あるいは存在するための場所であつて、自由に加工する対象としての空間でもなければ、安易な加工に反逆する空間でもない。せいぜい、キャッチボール用の空間なのだ——それすら不足しているが。

工房の一会員が、ヨーロッパにおける魔材を使った公園の例をスライドで紹介してくれた。魔材で、多種多様な、家や遊具を作り、遊んでいる子どもたちの姿

- 一 はじめに
- 二 安ずるより生むがやすし——準備
- 三 「ほくも作つていいの」
- 四 ガラクタ集落にランルの旗は翻える
- 五 「エー、焼き鳥はいかが」
- 六 「お父さんの遊び場になるの。するいや」
- 七 まとめと反省
- 八 遊びの態様
- 九 リーダーの介助と安全
- 一〇 父母、近隣の協力
- 一一 手づくりコミュニティ・センターを

があった。特別の空間、特別の材料ではない。街の片隅で可能である。よし、私たちもやってみようというわけで準備にとりかかった。

一九七四年九月のこと、すでに四年半を経ている。その内容は、私たちの活動を紹介した『なぜ塾へ行くの?』——現代版寺子屋実践記——(日本経済新聞社刊)において報告したが、今回横浜市都市科学研究室の要請に応え、一部稿を改めて再び紹介することになった。都市環境づくりの参考になれば幸いである。

二——案ずるより生むがやすし

準備

〔土地とその配置〕坪数十万円もする時代に、果たして、廃材を使って子どもたちが遊ぶような場所を貸してくれる人がいるだろうか——当たってみるしかない。そして地元の建設会社がまだ整地されてない建設用地を十月末日までに限って無償貸与してくれたのである。

場所の広さ、地形、配置は申し分なかった。横浜市南区永田町所在、広さ約一万平方メートル(三千坪)。整地されていないので、草が生えている部分もあれば、土砂の凹凸起伏が激しく、水たまりが池のようにできているところもある。広々としてなお変化に富んでおり、子ども

もたちの冒険心を満足さすだろう。さらに、広場の南側には、傾斜三十度以上の斜面をもつ高さ約四十メートルの丘があり、通信用鉄塔のそびえる頂上付近には灌木が茂っている。東側には一戸建ての分譲住宅が約五百戸。北には、入居が終ったばかりの高層住宅が並んでいる(約二千世帯)。公団住宅内と西側には、小学校が二校。住居地、学校に隣接しているのも、子どもたちも気軽に遊びに来れるはずだ。しかし、私有地ではあれ、これだけの空地があるのに、そこに遊んでいる子どもたちがほとんどいないのはなぜだろうか。

〔道具・運搬手段〕工房の道具類と工房同人所有のジープとライトバン。それだけでは不足である。が、広場に隣接した場所で造園業を営む友人が、カケヤやスコップの類を貸与してくれたばかりでなく、物置の使用やトラックの使用も快く承諾してくれた。

〔リーダー〕工房に結集しているおもちゃづくりの同好会のメンバーや、横浜国大の学生が余暇をぬって協力してくれることになった。しかし、なるべく子どもたちの自主性にまかせ、土、日曜以外は二名ほど広場にいれば良いだろうという結論になった。

〔安全〕事故防止のための最大限の点検と救急薬の常備はするが、原則として

参加者の責任であることを衆知徹底させること。救急のための病院の位置を確認しておくこと。不測の事態が起きたときは、できる限りのことをせざるをえなくなるだろうが、それはその時に考える以外にないという結論。父兄や近隣から苦情が予想されたが、それも誠意をもって話し合う以外にない。

〔廃材調達〕子どもが容易に加工可能なものであること、事後処理が簡単であることの二点を考慮し、燃えやすいもの、なにかんずく木材を選ぶことにした。廃材調達可能性と同時に、このような試みに対する援助の可能性を打診する意味で、まず横浜市当局に働きかけてみ

る。市民局青少年部……それぞれの部屋で興味と関心は示されたが、具体的な援助の手段はないとのことであり、公園の様態に関しても、事故保障の点で、「ガラタ広場」のような試みは無理とのことである。廃材調達は環境事業局の営業所で可能であった。廃材置場に投棄するための許可キップを購入する営業所があり、そこへ来るトラックに頼めばトラックごと廃材をまわしてくれることがわかった。同時に、廃物投棄場所でも相当の廃材が無料で入手できる——ただし、待機と運搬の労が必要である。

九月二十八日、廃業所行き的小型トラックに頼み、まだなにもない広場に「五トン分の廃材(柱材、タルキ、板材等)」が運び込まれた。かくして、「ガラタ広場」建設のための必要最小限のものがそろったわけである。翌二十九日(日)から開始することは塾の生徒たちには知らせてあったが、準備らしきものといえは、以上のようなものであり、以後、広場建設と同時並行的に、協力の輪が広がり、廃材も運びこまれた。

三——ほくも作っていつの

儀式はたったことは一切やめた。広場にいつのまにか廃材の遊び場ができていくという形でよい。



初日、塾の生徒たちを中心に、その仲間たち四、五十名、弁当もちでやってきた。リーダーたちは、廃材のくぎぬぎに忙殺され、予定していた看板の設置も翌日に持ち越されてしまった。

広場には金槌の音がひびき、たちまちのうちに二階建ての家、直方体の家、傾斜地を利用した避難所めいた草ぶき小屋などの骨組みがではじめる。また、骨組みだけなのに内装に熱中しはじめる女の子、山の斜面をのぼり下りして遊ぶ方に夢中になるもの、しこしこ板張りをして家らしき体裁を整えることに懸命なもの、建物の敷地だけをどんどん拡張して網張りするもの……。午後になって、ちらほら近隣の子どもたちが飛び入り参加を申し込んできた。

第一日目。広場に六、七軒のバラックが、によっきり立つた。荒廃のまま打ち捨てられていた感のあった広場が不思議な息吹きをとり戻したようにみえる。しかし、運び込んだ廃材で使えそうなものはほとんどなくなってしまったのである。

翌日、「ガラクタ広場にあつまれ！」の看板を立てる。他の人のつくっているものを壊さないこと等、いくつかの注意事項。そしてゴミ捨て場を利用しないでほしいとの要望書。看板の前に立ち止まり、昨日建った小屋を前例として、下校

時の子どもたちが自分たちも参加できるのが聞きにくる。自由にやれることを知ると、勇躍、家から金槌、釘を持ってやってくる。廃材の少ないことを嘆きながら、獲物を平らげる飢えたハイエナのように、古釘を抜く暇さえ与えずに。

急務であった廃材の調達も、近隣の好意によってめどがついてきた。一つは工場の燃料用ストックとしてあった廃材を広場解散後返却する約束で借用することができた。もう一つは、家屋解体業者の好意により、大量の柱材、足場用材、戸板、引戸、床材のほか鋳物用木型や、網なども、多くは会社のトラックごと運んでくれたのである。かくして、次の日曜日は前半のピークとなった。

四——ガラクタ集落に ランルの旗は翻える

一週間のうちに、広場周辺にはほぼ知られたったようだ。平日四、五十名だった人数が百五十名ほどにふくれあがった。平日だと放課後から日没まで二時間もない。建てかけの家を一举に完成しようとするもの、初めて参加するもの、親子連れもちらほらみえる。廃材の古釘を抜いて、それを再び使って板をうちつけているものも多い。インディアン、コボシチ団、ドテカングループ、ブラックジ

ャガー、マタンキ連盟、コンバットスリ、きつね連盟、……。それぞれのグループ名が急造の屋号となる。大方は遊び仲間のグループである。

大人たちも、工房の会員とその友人たちが参加して、はじめて大がかりな建造物を作った。丸太を番線で結えたやぐら（後に子どもたちに占領される）。救護本部兼道具置場の小屋。丘の斜面の中腹に網を張り、頂上からはツタで編んだロープを垂らした。

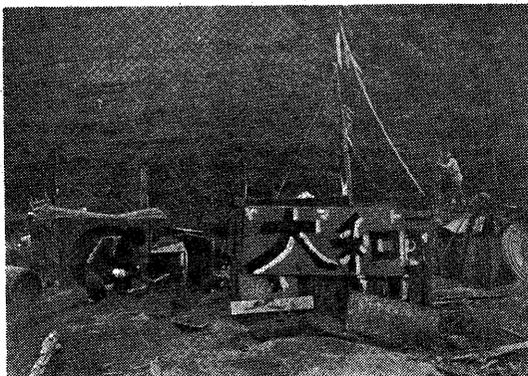
この急傾斜の斜面は、以後、スリルに満ちた遊び場となる。網をはいのぼるだけでなく、そこをまたすべり下りる。ツ

タのロープにじゅずつなぎにぶら下りゆさぶる。——このツタは十日後、危険性がみえたので廃止した。大人にはかなり危く見えるのだが、子どもたちの方ははるかに身軽である。

この日までに、約三十軒近い小屋が建ち並んだ（そのうちには、骨格だけのものもあるが）。

以後、二週間くらいは、日常的な遊び場としての定着時期といってよい。雨の日を除けば、少ないときで、一日四、五十名、多いときで百名ほど入れ替り立ち替り利用した。建て増し補修をするグループ。小屋で漫画を読んだりおしゃべりするグループ。新たに参加して小屋を建てる者。斜面をのぼり下りする者。かくれんぼや鬼ゴッコをするもの。また、地盤がゆるく打ち込みの浅い柱が、雨風に倒れ、再建の意欲をなくして放棄するグループ、未完成のまま放置し、放棄とみなされたか、材料略奪の対象になったか、いつのまにか消えてしまったわが家に意気消沈するもの、メンバーが離合集散するグループ。かくして、前半に建てかけた小屋の半分以上は、消滅するか、模様替えた。

一方、廃材提供の輪も徐々に広がり、一般家庭の古材から、業者の半端物まで、布端やロープ、ペンキといった類が工房に寄せられた。



五——「エー、焼き鳥はいかが」

広場の借用期限が十月末日までであることから二十七日(日)を最終日とし、二十六日夜には宿泊希望者は泊めること、二十七日はお祭りとするのが予告された。そのためか、二十日(日)から二十七日(日)までの一週間は連日百名を越す子どもたちが広場に集まった。区外からバスや電車で来るものも現われた。

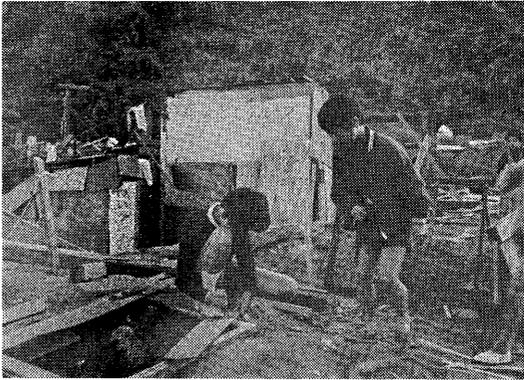
窪地、雑草の陰、水たまりの中州、そして土地を貸与してくれた会社のダンブカーが整地用に運び入れた土砂の上まで、子どもたちの小屋が占領した。古椅子物見つき二階建て、鋳物用木型で作った戦車型要塞、片屋根の家、インディアン式錐形の小屋……。それらは、メーカー放出の古ペンキによって彩られた。小屋の中には、古だたみが敷かれ、空缶のれん、屋根には上げ下ろし自在に工夫された端布や風呂敷の旗がひるがえる。金槌の響きが前の高層住宅に反響する。

斜面の網をはい登り、お尻を真黒にしてはしゃぐ近隣の幼稚園児たち。子どもそっちのけでシャベルや金槌をふるう父母。乳母車を押して見に来る若い母親たちの姿も見られた。

二十六日(土)、宿泊希望者は父母の許可証を提出、寝袋や毛布をもって集まる。炊事用具持参のものもある。キャン

プファイヤーが夜空を焦し、おき火で焼き芋パーティー。自炊のライスカレーや焼き鳥を売り歩く商売上手もいる。父兄からの差し入れ品もいくつか。ローソクの光の中で持参の弁当をはおぼるグループ。この雰囲気立ち去りかねている子どもたち。今からでも遅くないと許可証をもらいに家へ急ぐもの。結局三十六名が、自分の作った家に分宿。うち、女子二名。最年少者は小学一年生の女の子であった。

夜半、子どもたちが眠りについた頃雨がぱらつく。雨洩りの危険。一度止み、再び午前三時頃雨。今度は、退避せざるを得ない。リーダーが車で家へ送り届けた。



る。雨洩の危険を見越して父親がシートで覆った家のグループだけは、翌朝まで宿泊した。

二十七日のお祭りは雨のため中止。子どもがお祭りに行くといってきかないのだが、やるのだからかという問い合わせの電話が数件。雨の晴れ間をぬって、広場に來てみたという子もかなりいた。人形劇やフォークグループがこの日のために協力を申し出てくれた。晴天ならば工房同人の手づくり実演もあるはずだった。菓箱づくりは室内で決行。不用品交換市のために提出された品物数十点(これは後日売却して広場出費の一部にあてた)。

六——「お父さんの遊び場になるの。すくいや」

翌二十八日から解体作業。下校時の子どもたちの中には、まだ補修しようとするものもある。どうせこわすなら自分の手で、と申し出るもの。「お父さんの遊び場になるのか、すくいや」。「ねえ、今度はどこでやるの」。さすが一カ月を通してほとんど毎日顔を見せていたものほど愛着を断ちがたいようだ。

参加者の母親五、六人、作業を手伝ってくれる。廃材の半分は焼却処分。半分は返却。三日がかりで、広場はもとの荒

地に戻った。

その後、家の庭に小屋をつくり、そこをすみ家にして遊んだり勉強している子もいるようだ。また、一方、遊びに集中できたためか、時間の区切りをつけて勉強にも集中するくせがついたという報告も届いている。

七——まとめと反省

雨の多かった十月にもかかわらず(廃材工作をせず、広場で遊んだだけのものを含めれば)、参加人員は延べ五千人はあった。しかも特別の宣伝や子どもを集めるための特別のイベント(アトラクションや景品つき競技等)を一切せずにである。このことは、自然に近い起伏に富んだ広場、廃材という原始的で荒っぽい素材が子供の創造性、冒険心を満足させたことによる。同時に、広場が、子どもたちの居住地や学校に近接していたことに負うことが多い。区外からの参加者もあったが、大多数の参加者は、周辺の居住者であり、特に一カ月を通じて週二、三回以上は広場に顔を出した常連といえ、徒歩十五分以内の居住者に限られる。遊びの圏内はそれほど広くないし、下校——帰宅——広場までの時間から日没時間まではそれほど長くない。そして家を建てるといった、ある程度時間がか

かり、永続性を必要とする遊びには、場所の近接は必須であり、参加回数が減れば、愛着も薄れ、倒壊破損に対しても再建補修の意欲をなくしてしまうことになる。

参加者の年齢は、小学三〜六年生が圧倒的に多い。中学生はごくわずかで、家を建てたのは二グループにとどまった。

近くに中学校はなく、また中学生の数も少ないという条件によるものだけでなく、中学生の遊びに対する消極性は一般的な傾向のようである。

小学一、二年生には、自分たちだけで廃物を利用するのはかなりの力業であって、見よう見まねで家らしきものを構築するものもあったが、一日で放棄するものが多かった。兄弟が一緒の場合には、それがかなりちがってくる。しかし、学年を越えた遊びのグループはあまりなく、低学年の者はむしろ斜面上り下りといった遊びが多かった。

幼稚園児は先生に引率されてきて、一、二時間遊んで帰る。

男女の比率でいえば、建てた小屋の軒数や宿泊者数になると、男子の方が多かったが、女子といえは、かなりの人数が参加した。

参加時間は、平日は小学低学年から高学年へと、二時すぎの下校時から次第に多くなる。下校時、カバンを持ってきたまま、

ひとしきり遊んで帰ってしまうもの、この三つのパターンがあり、家づくりに熱中しているグループは、真暗になる五時半から六時頃まで広場に残っていた。最盛時期は、小学高学年の集まる三時半から日がかげりはじめる五時の間。塾やおけいごごとのため、しきりに時間を聞きにくるものもいた。

日曜には、午前九時すぎにはやってくるものもいる。弁当を持参したり、売店でパンや牛乳を買ったりして一日中いるもの——それほど遠くなくても、外で食事をするのは楽しい。親子連れの参加、区外からの参加が多いのも、もちろんこの日である。

八——遊びの態様

指定したわけでもないのに、工作物としては、ほとんど全部が家を構築した。これは、グループ作業として自分たちの空間を所有すると同時に、グループ内部の親密さを固めるには都合よく、加えてさまざまな付属工作(屋内外の装飾等)の余地があるからだろう。

遊具の工作や集団の大きがかりな遊びの自己組織化はみられなかった。急斜面を上り下りする単純な遊びに結構夢中になった。大きな水たまりともいうべき池の中を歩きまわったり、鋳物用木型をシー

ソー代りにしたりする。もちろん、家をつくることが最大の遊びだったのである。ナイフも使えないという評価が一方であるが、金槌や釘抜き、ノコギリなど、けっこう使いこなすし、やり始めると覚えるのも早い。足場の不安定な急斜面を、昇降する際も、大人より機敏である。

家を建てる場合、最初、頭の中に完成図を描き、それに従って、骨組みから頑丈に組み立てていくという手順をふんだのは、高学年のわずかのグループだった。多くは、ありあわせのもので、いち早く、家らしき空間をこしらえあげることに夢中で、ともかく板囲いをしていく。雨洩り、すきま風、内部の広さ、等々の考慮は及ばない。もちろん、それが遊びの遊びたるゆえんで、興味のおもむくまま自分の可能性に従って試行錯誤をくり返し、段階を追っていくのである。

これは補修や建て増しの段階で明確にあらわれる。色を塗ることに對する欲望の強さも、こうした自己実現の即時性に一部は起因するのだろう。五十伍ばかりのペンキはすぐになくなってしまった。道具や釘など、必要なものは自分で持ってくることを原則としたが、最初のうちは貸してくれ、あれが欲しいといってくるものが多かった。すべてあつらえてくれるものという慣習は根強い。また、シャベルやカケヤ、ペンキのハケといっ

た稀少の道具は必要に応じて貸し出したが、使用後きちんと返却せずに帰宅するものが多かった。こうした自己規律のなさは、個別にみれば、参加回数が多くなるにつれて減少してきた。他人の家の材料をわがものにしてしまうといった事柄も同様である。

家のグループはそれぞれ遊び仲間なのだが、建設過程での離合集散は面白い。具体的な状況の中から、ゆるい人間関係は解体し、後に強化されるものもあるからである。

ガラクタ広場の集落全体についての集団性、横のつながりや遊びは、ほとんど自然発生しなかった。材料をとられたり、家をこわされたという不平をリーダーに対して嘆きにくるものはいても、直接——喧嘩をしても——解決しようとはしない。自分の家用に使えそうな廃物を持ってくるものは若干あらわれたが、グループで探し、求めてくるには至らなかった。

看護婦志願者やさまざまな広場の情報をリーダーに知らせに来るものは出だしたが、こうした広場全体のつながりは、最終日の宿泊といったイベントを契機にしてゆかねばむずかしいだろう。

九——リーダーの介助と安全

リーダーの役割は、裏方に徹底した。

腐材の供給、古釘抜き、大きな柱を打ち込むとき、必要に応じて手伝ったり、大型の木材を使用してある建物を点検して危なそうなところは、カスガイでとめたりしておくことだ。リーダーが工作したものは、看板、やぐら、斜面の網、遊動円木とぶらんこ。宿泊の世話と、中止になったがお祭りの組織。

平日で二、三名。休日で七、八名、それも必要な作業をしつつであるから、個々のグループに対する積極的な介入はほとんどしなかったといつてよい。遠くから見守っている形が、子どもたちの自主性を促す上では最も良いだろう。ただし、期間がもっと長期にわたり、定着性、恒常性をもったものにしていく段階では、子ども同士の横のつながりを強めていくためのきっかけを作ったり、常時子どもたちの相談にのったりするリーダーの専従が必要にちがいない。

おとなのリーダーの動員数は延べ約百人。老若男女の工房会員等の無償の協力があったり可能であった。

行政当局がこの種の試みに躊躇する際、最大の障害としてあげるのは、事故の危険性とその責任問題である。「ガラクタ広場」での怪我は、病院へ運ぶ必要が生じたもの一件(足の捻挫)。あとは、擦過傷、打撲、釘のふみ抜き等、消毒と

バンソウ膏、包帯ですむものだった。

子どもたちは試行錯誤によって成長していく。小さな怪我をしながら大きな怪我を防ぐ術を習得していくのであって、小さな怪我は成長のための当然の代償である。そして子どもたちは、おとなが考える以上に器用であり、順応性も高い。むしろ、試行錯誤の経験をもたず過保護のまま成長した場合の方が、状況判断ができずはるかに危険度も大きくなる。

こうした認識は、父母の間にもかなり浸透していて、むしろ経験の機会がないことを嘆いている人が多いのである。「ガラクタ広場」に限っていえば、参加者の自己責任性は当然とみなされていたようで、苦情らしきものは一件もなかった。たしかに、重大事故の確率は少ないとしても、絶対起こり得ないといったものではない。こうした事態を予測した場合掛金の少ない簡易交通災害保険に匹敵するような保険制度を遊び場等の催し物や施設内事故にも適用するようなシステムを確立すべきであろう。

一〇 父母、近隣の協力

企画の性質と営利目的でないことが、多くの協力を得られた原因であろう。場所、腐材、廃物の提供、道具、運搬手段の提供。トイレの貸与。そして、実

質的な労働と精神的な支援。こうした協力の大きさは、逆にいうなら、この種の遊びへの欲求の大きさを物語っていると見える。さらに望むなら、その中から小規模でも自発的な組織化の芽が出てくることであろう。

使用した腐材、廃品は約二十五トン(角柱、タルキ、ベニヤ、戸板、窓枠、床板、鋳物用木型、網、ロープ、古だたみ、端布、茶箱、ダンボールなど)。これらは、市環境事業局、家屋解体業者、合板商社、一般家庭などから提供された。ペンキもメーカーが不合格のストックを提供してくれた。金物類の一部も提供を受けた。

以上に述べたように、人材、物質両面にわたって無償の協力で支えられ、しかも、腐材、廃物を利用した結果、経費はほとんどかからなかったのである。

一一 手づくりコミュニティ・センターを

「ガラクタ広場」一カ月の試行錯誤を経た後、さらに継続を望む子どもたちの期待は、日常的な遊びの拠点、かくれ家であり、子ども社会の交流の場でもあり、宿泊も許されるような空間の建設であった。そのためには、一方では、風雨の日でも居住可能な程度堅固な小屋

が必要である。電気設備と炊飯設備もあった方がいい。とはいえ、腐材を利用した丸木小屋程度で十分であるし、その方が魅力的である。そこは、子どもたちの団らんの場であると同時にリーダーの宿泊所、道具置場ともなる。他方、「ガラクタ広場」におけるように、小屋を自由に作ったり、腐材の工作をしたり、また遊んだり、時に応じて野営宿泊できるようなオープンスペースが必要である。このような場があれば、都会では失われてしまった子ども社会が、遊びと共同生活の中から再生するだろう。

とはいえ、単に「子どものため」というだけの空間であるならば、活動にも限界があり、空間の有効利用という点からももったいない。いや、私たち大人にも、こうした空間は必要なのである。そうした考えのもとに、私たちの経験を参考にしつつ、以下のような、資源再利用をベースとした「手づくりコミュニティ・センター」を提唱した(一九七五年、資源再利用運動懸賞論文、最優秀賞、総理府総務長官賞受賞——新生活運動協会・朝日新聞社共催)。

そこでは次のような活動が行われる。

①子どもたちには、私たちが「ガラクタ広場」に実現したような腐材、廃品を利用した自由で創造的で冒険的な遊び場を提供する。

⑧老人たちには、自分のもつ技術や知識を積極的に活用しつつ、しかも若者や子どもたちと交流するいきがいの場を提供する。

⑨社会人、主婦には生活に役立つ技術（手づくり食品の作り方、家屋・家具、電気製品などの修理、再生技術など）やいこいの場（おもちゃづくりや木工、陶芸、金工などの同好会…）を提供する。

⑩物質文明の中に失われていく日本人のすぐれた伝統的生活技術を発掘、収集、保存し、新しい形で再生していくこと。

⑪地域内で、ボランティア活動を推進する（たとえば身障者や老人たちのために特別注文の家具、道具などを考案し、

作り出すことなど）。

⑫その他、地域内やセンター間の情報に基づいて、地域コミュニティの形成に有効な各種の催し物（不用品交換会、廃品利用アイデアコンテストなど）を企画する。

以上のようなセンターは、従来の社会的概念の中にはない総合的なものであり、福祉施設、公園、民芸館、老人クラブ、子ども会、成人学校などの要素を合わせ備えている。

「ガラクタ広場」や「手づくり工房」の運営経験から見ると、このようなセンターには最低、次のような条件が必要である。

①老人、子ども、主婦、社会人が気軽に

に出入りできるように、都会の住民の生活空間に近接して、町や団地の中に設置されること。

②木工、機械、電気その他の基本的な道具を設備し、自由に利用できるように整備すること。

③企画、運営、技術指導のための人材を養成するシステムを考えること。また老人層の技術や指導力を積極的に活用すること。

④廃材、廃品の社会的流通過程をくわしく調査し、その中にセンターを巧妙に組みこむこと。また、一般家庭、商店、工場などの不用品、廃品、きずものに関する情報を集約する機能をもつこと。

⑤センター内で生まれた各種のアイデア

情報を、有効に各センター間に流し、かつ公開すること。

⑥センターの自由で創造的な雰囲気をつくりだす。自治体などの公共団体や民間企業による有効な援助体制を作る。

以上述べてきたような「手づくりコミュニティ・センター」は金とものがあるが、資源再利用と人間関係の豊かな再生という現代の重大な社会的課題にこたえるものとして、多くの経験と英知の結集のもとに開花するであろう。

へみなみ工房・みなみ学習塾